

『消滅都市』

第十二話『未来』

決定稿

脚本・入江信吾

《登場人物》

タクヤ

ユキ

ギーク

ユミコ

コウタ

エイジ

キキョウ

ソウマ

アキラ

スズナ

ツキ（台詞なし）

タイヨウ

ツバサ

ヨシアキ

根岸ヘイジロウ

根岸リョウコ

柿崎ユウジ

日高ケイゴ

ルイ

ジャック

スマイレ（台詞なし）

SPR5メンバー

ダイチ

ミフユ

キャスター

スタッフ

捜査一課長

同級生1・2

ラクーナ研究所広報担当
同所長

奇術師

警視庁捜査一課刑事

同刑事

元刑事

私立探偵・元刑事

○ロスト内部

前話より。

タクヤ「あれは……」

タイヨウは片手でダイチの首を締め上げていた。

ユキ「お父さん！」

ダイチ「ユキ……」

タイヨウ、タクヤらに顔を向け、

タイヨウ「ほう。生身でここまで。だが遅かったな」

次の瞬間、ダイチは粒子状に分解され、霧散する。

ユキ「……」

タクヤ「てめえ……!!」

ユキの感情が爆発する。

ユキ「——あああーっ！」

頭上にアキラと無数の拳銃が現れ、広範囲から一斉射撃!

ユキ「ああああーっ！」

さらにアキラが特大のバズーカを放つ! 砲煙が晴れると、そこには無傷のタイヨウがいた。

タイヨウ「その程度か」

タクヤ・ユキ「!」

絶体絶命のタクヤとユキ。

タイヨウがオーラの光球を放つ!

○オーブニング

○ロスト内部

タクヤとユキに光球が迫る。

タクヤ・ユキ「!」

為す術もない二人。

その時、アキラが身を挺して光球を受け止める。

ユキ「アキラ!」

アキラ「ユキさん。ここでは想いの強さが全てです……想いを、強く持って下さい」

一方のタイヨウは、二人などいないかのごとく周囲を観察している。

タイヨウ「ダイチの肉体は消したはずだが……ロストが拡張しない。何故だ」

タクヤ「くそっ……！」

ひとまずその場から離れるタクヤ。

スクーターを駆りつつ、

タクヤ「どうすれば……考えろ、考えるんだ！」

ユキ、目を閉じ強く念じる。

連動してアキラが光球を跳ね飛ばす。

光球が見えない壁に当たったかのように

空間に亀裂が入る。

タクヤ、一か八かその亀裂にスクーター

ごと飛び込む。

そこはこれまでと違う空間で、スクーター

は肌色の地面を走っている。

俯瞰すると、それは巨大な人の掌の上。

スクーターは指先に向かって走っている。

タクヤ「これは……」

巨大な眼球が天から見下ろし、

ダイチの声「信じるんだ……自分たち自身を」

ユキ「お父さん……？」

タクヤ「よし……」

タイヨウ、空間が変質したことに気付く。

タイヨウ「ん……？」

巨大な指がクイツと曲がり、スクーター

はそれに沿ってタイヨウの方へとコース

を変える。

一気に加速するタクヤ。

タクヤ「ユキ、今だ！」

念じるユキ。

アキラが銃弾をタイヨウに放つ。

回転しながら真っ直ぐに飛ぶ銃弾。

その表面に次々とタマシイが宿り、重な

っていく。

ツバサ、スズメバチ、ロウ、ヒナコ、養

護学園の子供たち、SPR5（本編に登

場し、ロストに巻き込まれたタマシイ）。

想いが重なる度に銃弾の先端は鋭利に変

形していく。

が、タイヨウの目前で銃弾はバリアに防

がれる。

タイヨウ「ふん」

タクヤ「そんな……!!」

変質した空間が元に戻る。

タイヨウ「時間がない。ロストを完全なものにしなければ」

タクヤ「ロストを……? どういうことだ」

ユキ「キキヨウが言ってたわ。ロストはまだ終わってない、って」

タクヤ「ふざけるな! 既にどれだけの人間が犠牲になったか分かってるのか!」

タイヨウ「たかだか数万人だろう」

タクヤ「たかだか……?」

ユキ「……ッ!」

その時、一度防がれた銃弾が再び回転を始め、バリアに亀裂が生じていく。

タイヨウ「ほう……」

バリアはついに粉々に砕ける。

ユキ「それが私たちの想いよ」

ユキの頭上、アキラが拳銃を構えている。

タイヨウ、周囲を見回し、

タイヨウ「ダイチ……出てこい。まだいるんだろう?」

空間全体がフラクタル模様を形成する。

あるいは毛細血管に、あるいは海岸線や雪の結晶やアンモナイトの殻に。

タイヨウ「ふっ……この空間そのものがお前というわけか」

ユキ、周囲を見回しダイチを探す。

ユキ「お父さん……!!」

タイヨウ、ユキを見やり、

タイヨウ「ならば……(あれを消してやろう)」

タイヨウの頭上に一際巨大な光球が形成されていく。

タクヤ「……!!」

タイヨウが目を見開いた瞬間、光球が放たれる。

タクヤ・ユキ「!」

為す術もないタクヤ、ユキ。

が、光球は二人の体をすり抜けていく。

タクヤ・ユキ「?」

タイヨウ「なっ……」

「続いて攻撃を繰り出すが、やはりことごとくすり抜けていく。」

自分の両手を見るタイヨウ。

「あちこち粒子状に分解されつつある。」

タイヨウ「体が……!」

タクヤ・ユキ「……」

タイヨウ「クスリはまだ効いているはず。そもそも何故あの二人は存在していられる?」

ダイチの声「まだ分からないのか」

周辺の空間が変質する。

広大な宇宙空間にたった一人のタイヨウ。

タイヨウ「……?」

ダイチの声「それはお前が一人だからだ」

タイヨウ「!」

× × ×

フラッシュ、#10より。

実験室にて自ら志願したツキ。

ツキ「タイヨウ……ほら……私、あなたのこと、ちゃんと覚えているわ!」

× × ×

タイヨウの周りの空間が元に戻る。

向こうにはタクヤとユキ。

タイヨウ「なるほど……互いを観測し合うことで存在を確立していたのか」

分解がタイヨウの全身にも及んでいく。

タイヨウ「ふっ、健気なことだ。私の背負っているものに比べればあまりにも脆弱」

タクヤ・ユキ「?」

タイヨウ、天を仰ぎ、

タイヨウ「私には、数百万人の未来が懸かっている!」

分解されつつも力を振り絞るタイヨウ。

タクヤ「(身構え)！」

ユキはタクヤの後ろでぐったりしている。力を使い果たしたのだ。

タクヤ「ユキ! 大丈夫か!」

ユキ「タクヤ……ごめんなさい……肝心なところで私……」

アキラの姿が徐々に薄れていく。

アキラ「ユキさん……!」
タイヨウ「時間を無駄にした」

と、懐から拳銃を取り出す。

タイヨウ「終わりにしよう」

タクヤ「くそっ……!」

アキラ「タクヤさん……」

タクヤ「?」

アキラ「ユキさんを……頼みます……」

アキラの姿が完全に消え、一丁の拳銃だけがゴトリと残る。

拳銃を手にするタクヤ。

タイヨウに向かい、スクーターを加速させる。

タクヤ「ユキ、掴まってるよ!」

右手でスロットルを回し、左手で拳銃の狙いを定める。

タクヤ「行くぞタイヨウ!」

タクヤの後ろからユキが手を伸ばし、タクヤの左手を支える。

タクヤ「ユキ……」

ユキ「(強く頷き)……」

タクヤ、右手もハンドルから離し、ユキの手に重ね、しっかりと狙いを定める。

拳銃を構えているタイヨウ。

が、体が小刻みに揺れ、照準が定まらない。

タイヨウ「!?!」

ハツとして左腕の肩口を見るタイヨウ。

スズナの銃弾により一部が裂けている。

タイヨウ「まさか……!」

○封鎖地区内・ロスト周縁部(回想)

スズナがタイヨウの背中に銃を向けている。

スズナ「あああーっ!」

スズナ、発砲!

タイヨウも振り向きざまに発砲!

スズナの弾丸はタイヨウの上着を掠める。

スズナは胸部に被弾し、倒れる。

スズナ「がはっ……!」

タイヨウ「これくらい予測できない私だと思
ったか」

スズナ「う……うう……」

タイヨウ「お前の能力も所詮その程度という
ことだ」

と、ロストへ向け一人歩いていく。

○ロスト内部（現在）

タイヨウの心臓がドクン！ と脈打つ。

タイヨウ「スズナめ……！」

視界が歪み、体中を毒が回っていく。

タイヨウ「くっ……」

○アパートA・スズナの部屋

跳ね上がったままの畳。

無数に枝分かれたチャートで唯一、『X』
が付いていない選択肢。

『命を捨てる』とある。

○封鎖地区内・ロスト周縁部

うつ伏せに倒れているスズナ。

その死に顔にはうっすらと笑みが。

タイヨウ（オフ）「私を油断させるために……

命さえ投げ出すとは……」

○ロスト内部

拳銃を両手で構え、スクーターでタイヨ
ウに突撃するタクヤとユキ。

どうにか拳銃を構え、迎え撃つタイヨウ。

タクヤ「これで最後だ！」

タイヨウ「くっ……！」

タイヨウの放った数発の銃弾は全てスク
ーターに着弾。

一方、タクヤとユキの銃弾はタイヨウの
心臓を撃ち抜いた。

タイヨウ「……！」

バランスが崩れ、空中に投げ出されるタ
クヤとユキ。

ユキをかばいつつ、崩壊した道路に着地
するタクヤ。

ゆつくりと膝から崩れ落ちるタイヨウ。
タイヨウ「こんなはずでは……私は人類の未来を背負って……！」

タクヤ「お前は何も背負ってなんかいない。身近な人間一人守らないで、何が人類だ」
タイヨウ「これでは一体何のために……何のために私は！ うあああーっ！」

タイヨウの体が完全に分解され、霧散していく。

タイヨウの声「死にたくない……（い）……！」
空間の歪みが戻り、静寂が訪れる。

ユキ「タクヤ……」
タクヤ「ああ……」

力尽きたユキ、タクヤにもたれかかる。

タクヤ「ユキ？ ユキ！」

目を閉じたまま反応しないユキ。

タクヤ「ユキーっ！」

○中CM

○ロスト内部

眠ったままのユキ。

傍に座り、悲痛な顔で見守るタクヤ。

そこへ声が響く。

ダイチの声「ユキ……」

タクヤ「！」

浮遊する粒子が淡い人型を形成し、ダイチが姿を現す。

ユキ、ゆつくりと目を覚ます。

ユキ「お父さん……」

ダイチ「よく頑張ったな、ユキ」

ユキ「やっと……会えたね……」

タクヤ「ユキをロストへ呼び寄せた理由は何だ。こんな目に遭わせる必要があったのか？」

ダイチ「この子にしか出来ないことがある。

ユキは世界を選べるんだ」

ユキ「ー！」

タクヤ「世界を、選ぶ……？」

ダイチ「ユキ。お前は二つの世界に跨がる存

在。可能性を収束させることが出来る、即ち観測者なんだよ」

ユキ「観測者……?」

タクヤ「……?」

ダイチ「お前なら全てをやり直せる。さあ、おいで」

タクヤ「……」

ユキ「……」

ユキ、立ち上がり、ダイチのもとへ歩き出す。

ダイチ「そうだ、ユキ。私はこの時をずっと待っていた」

ユキ「……」

タクヤ「ユキ……」

手を差し伸べるダイチ。

その手に自分の手を重ねるユキ。

ユキ「お父さん……」

ダイチの手から光が発せられ、周囲を包み込む。

ダイチ「さあおいで。悲劇など起きなかった、幸せな世界へ」

空間がホワイトアウトし――。

○ユキの家・表

○同・リビング

ミフユが赤ん坊のユキをあやしている。

ユキ、その小さな手でミフユの指を掴む。

ミフユ「(微笑み)……」

○埠頭(夜)

#9より、ダイチがタイヨウに殴り飛ばされたところ。

タイヨウ「お前が裏切ったのは事実だろう。

使命を忘れたのか」

ダイチ「ポータル装置はいずれ完成させる、

ただノア計画の在り方については考えさせてくれ」

タイヨウ「そこは科学者の領分じゃない」

ダイチ「科学者である前に人間だ!」

とタイヨウを殴り返す(※ここから新規)。
タイヨウ「!」

ツキ「!」

ダイチ「……」

タイヨウ「そうか……それがお前の答えか。
覚悟しておくんだな」

去っていくタイヨウ。

後を追うツキ。

ダイチ「……」

○ユキの家・リビング(朝)

テーブルで新聞片手にコーヒーを飲んで
いるダイチ。

ミフユが後片付けをしつつ、

ミフユ「ソウマ、お弁当持った?」

ソウマ、鬱陶しそうに、

ソウマ「持ったよ」

ユキは手鏡で寝癖を必死で直している。

ミフユ「ユキ、いつまで寝癖気にしてるの。

遅刻するわよ」

ユキ「はい」

ダイチ「ふふ、ユキも年頃なんだな」

ユキ・ソウマ「行ってきまーす」

○同・表

アキラの車が停まっている。

後部座席に乗り込むユキとソウマ。

ミフユが出てきて、

ミフユ「それじゃ今日もよろしくお願いしま
す、アキラさん」

アキラ、運転席から、

アキラ「お任せ下さい」

走り出す車。

○走る車の中

後部座席のユキとソウマ。

ソウマ「あー、テストなんてかったりいー」

ユキ「そういう言い方しないの。ちゃんと授
業聴いてれば問題ないでしょ」

アキラ「ユキさんは勉強が出来ますから」

ソウマ「え、アキラそれって僕が頭悪いってこと?」

アキラ「違いますよソウマさん」

ソウマ「僕、本気出してないだけだから」

ユキ「じゃあ出しなさいよ」

ソウマ「いつかね」

屈託無く笑うソウマ。

ユキ「もう」

ユキもつられて笑ってしまふ。

○ラクーナケミカル社・表（夜）

刑事らに伴われ、タイヨウとツキが悄然と出てくる。

手錠を掛けられた両手の上からジャケツトが被せられている。

キャスターの声「出て来ました！ 施設の子供たちを利用した悪質非道な人体実験を行っていた容疑により、ラクーナケミカル社所長と副所長が今、警察に連行されていきます！」

パトカーに乗り込むタイヨウとツキ。

野次馬に紛れて見ているのはタクヤとカイバラ。

イバラ。

カイバラ「良くやったな、タクヤ」

タクヤ「はい」

その誇らしげな表情。

○ユキの家・ダイニング（夜）

テレビでそのニュースが流れている。

オムライスを食べているユキ、ソウマ、

ダイチ、ミフユ。

ミフユ「身寄りのない子供たちを……酷いわね」

ユキ「ホント。許せない」

ソウマ「母さん、グリーンピース抜いてって

言ったじゃん！」

ミフユ「好き嫌いはダメよ」

ソウマ「父さん！ 父さんは！」

ダイチ、テレビは観ずに黙々と食べている。

○上空

ロストの穴は空いていない。

○テレビ局・控え室

ステージ衣装のヨシアキがそわそわしている。

スタッフが顔を出し、

スタッフ「ヨシアキさん、そろそろ本番です」

ヨシアキ「は、はい……」

声「緊張してるのか？」

ヨシアキ「は、はい……って、え？」

いつの間にか窓際に男が立っていた。

ツバサである。

ヨシアキ「！ 兄さん……！ え、え？」

ツバサ「お前は奇術師だろ。常に冷静でいろ」

ヨシアキ「い、今までどこに……！ ていう

か何で……」

ツバサ「戦う理由も隠れる理由もなくなった、

といったところかな」

ヨシアキ「色々訊きたいこと山ほどあるけど

……その前に一発殴らせろ」

ツバサ「そいつは痛そうだ」

ニカッと笑むツバサ。

○警視庁・捜査一課

根岸へイジロウが課長らから拍手を受けている。

課長「警視総監賞だ。お手柄だった」

根岸「みんなのおかげです」

と、デスクへ戻ってくる。

リョウコとケイゴ、ユウジが出迎える。

リョウコ「おめでとう、お父さ……根岸警部

補」

ユウジ「あのラクーナを相手に凄いです」

ケイゴ「長年追ってた案件でしたもんね。（指

をクイッと）どうです今夜」

根岸「まだまだ余罪はあるはずだ。忙しくなるのはこれからだぞ」

と、出ていく。

ユウジ「渋いなあ」
リョウコ「ふふっ、私たちも負けてられないわ」

と、根岸の後を追う。

○雑踏

行き交う人々。

街頭モニタではSPR5のライブが生中継されている。

買い物袋を提げ、微笑んで見上げるユキ。

○武術館

大盛況のSPR5ライブ。

曲間のMC。

ホムラ「みんなの応援のおかげで私たち、ようやくこの舞台に立つことが出来ました」
ナミ「ここへ辿り着くまで色々あったわよね」
ホムラ「あったねー」

ナミ「でもこの5人で乗り越えてきました。もうこの先何があっても負ける気がしないわ」

ハルカ「これからも私たちは全力で走り続けます。置いてかれないよう、ついて来て下さいね。チュッ」

と、たどたどしく投げキッスをする。

観客の戸惑いの声。

レナ「塩対応のハルカちゃんが投げキッス!? ど、どうしたの?」

ハルカ「今年はチャレンジの年にするって決めたの。レナの今年の抱負は?」

レナ「抱負? あ、もうドジっ子担当だなんて言わせない!」

ホムラ「レナはそのまんまでよろしく」

レナ「えー? じゃあユアちゃんも腹黒担当のままです!」

ユア「こちらこちら、そこー!」

ナミ「ふふ」

ユア「なんて言われ放題だけど、これでも人知れず枕を濡らした日々もあるんですよ。いやいやホントに。でもある人が励まして

くれたの。君は君のままでいいんだ、って。
その言葉のおかげで今ここに立てています。
本当にありがとう」

客席でギークが絶叫している。

ギーク「ユアたん！」

ホムラ「それじゃ、最後まで楽しんでいって
下さい。次の曲は——」

○ユキの家・表（夕）

○同・玄関（夕）

鍵を開け、入ってくるユキ。

ユキ「ただいまー。あれ……？」

明かりは点いているが、誰もいない様子。

ユキ「？」

恐る恐る進むユキ。

○同・リビング（夕）

リビングに入ってくるユキ。

ユキ「お母さん？ ソウマ？ みんなどこ行
ったの？」

その時、部屋の明かりが消え、真っ暗に
なる。

ユキ「！」

声 「ハッピーバースデー！」

暗がりからロウソクの灯がふわふわと近
付いてくる。

浮かび上がるソウマの顔。

ユキ「あ……」

ソウマ「姉ちゃん、ほら（消して）」

ユキ、ロウソクを吹き消す。

部屋の明かりが点くと、そこにはダイチ、

ミフユ、ソウマ、エイジ、キキョウが。

ダイチ「ユキ、誕生日おめでとう」

ミフユ・ソウマ「おめでとう！」

エイジ・キキョウ「おめでとう、ユキ」

ユキ「わー……」

感激に浸るユキで——。

○ロスト内部（現在）

目を開けたユキ、さめざめと泣いている。
タクヤ「ユキ……?」
ユキ「……」

ダイチ「これが本来あるべき幸せな姿なんだ。
その可能性を選べるのはユキ、お前だけだ」
ユキの目の前にまばゆく光る球が浮かんで
いる。

ダイチ「さあ選びなさい。全ての人たちのた
めに」

ユキ「私は……」

ユキ、光球に手を伸ばしかけるが、思い
直し、振り返る。

ダイチ「ユキ……?」

ユキ「私は選ばない」

ダイチ「何だって……?」

ユキ「もちろんロストなんて起きない方がい
いに決まってる。でも現実には起きたの。

その世界で私たちは生きてきたの」

タクヤ、じつと聞いている。

ユキ「お母さんもソウマもいて、誰も人生を
奪われないで、そんなのそっちがいいに決
まってるよ、でも！ ロストは起きたの！」
ダイチ「ユキ……」

ユキ「この3年間、みんな必死で生きてきた」

○封鎖地区付近・広場

沢山の献花が供えられている。

手を合わせ、静かに祈る人たち。

ユキ（オフ）「ある日突然大切な人を失って、
理由も分からなくて、それでも乗り越えて
いこうってみんな頑張ってる」

○街

若い夫婦が歩いている。

幼子が父親の肩車の上で笑っている。

ユキ（オフ）「ロストの後に生まれてきた命だ
って沢山ある」

○ロスト内部

ユキ「私がどちらかを選んだら、どちらかを

否定することになる。そんなこと、私には
出来ない」

ダイチ「ユキ、私はお前のために……」
ユキ「今まで色んな目に遭ってきた。辛かつ
たし、苦しかった。でもそれだけじゃない、
それだけじゃないの。だからここまで来れ
たんだよ？」

ダイチ「……」

タクヤ「何があっても俺たちは前に進む。可
能性つてのは未来にしかないからな」

ダイチ「！」

ユキ、周囲の空間を見渡し、

ユキ「ロストは起きた。だけど、生きていく。
この世界で」

タクヤ、ユキの強い眼差し。

ユキ「お父さん、ありがとう。でもごめんな
さい……私たち、そんなに弱くないよ」

ダイチ「ユキ……大きくなっただんな……」

光球がうっすらと消えていく。

代わりに朽ちた高速道路が現れる。

傍にはスクーターが。

タクヤとユキ、顔を見合わせる。

エンジンの音が先行し――。

○移動式ラボ・中

キキョウがモニタを見て、

キキョウ「あら……？」

エイジ「どうした」

キキョウ「わずかだけど、ロストの近くで重

力波が発生したの」

エイジ「内部で何があったんだ……」

ギーク「タクヤ！」

と、駆け出していく。

○封鎖地区内・ロスト周縁部

怪盗団のジープが走ってくる。

○走るジープの中

運転席のジャックが何やら気付き、

ジャック「おい、あれ……」

助手席のヨシアキ、「！」となる。

○封鎖地区内・ロスト周縁部

ジープが停車し、ヨシアキとルイが降り立つ。

ヨシアキ「ユキちゃん！」

ユキが倒れている。

駆け寄るヨシアキとルイ。

ヨシアキ「しっかりしろ！ タクヤさんは！」

周りには誰もいない。

ルイ「とにかく病院へ！」

○封鎖地区入口

警察の検問ゲートを強引に突破し、封鎖地区内へ侵入する軽トラ。

○走る軽トラの中

運転しているのはギークだった。

ギーク「タクヤ……どこ行っちゃったんだよ

……DVD返すって約束したじゃないか……

……タクヤーっ！」

○ロスト周縁部上空

警察や自衛隊のヘリが旋回している。

○雑踏

T 『一ヶ月後』

以前と変わらぬ街の様子。

ヨシアキが奇術ショーを開いている。

ヨシアキ「では今からこの像を……消すのは

さすがに忍びないので、このペットボトル

を消しましょう。ワン、ツー、スリー。は

い」

見物人のまばらな拍手。

足元の箱にはいくらかの投げ銭。

ヨシアキ「ありがとうございます。ありがと

うございます」

○日高探偵事務所・中

電話応対中のケイゴ。

ケイゴ（電話）「ええ、お安いご用です。旦那さんの浮気調査ですと一日あたり10万円となりますが、はい……」

その電話を勝手に切るユウジ。

ケイゴ「ああっ！ てめえ何すんだ！」

ユウジ「浮気調査？ 俺はもっとヒリヒリするような仕事がしたいですね」

ケイゴ「仕事選んでんじゃねえよ！ だってら警察戻っちまえ！」

ユウジ「戻れるもんなら戻ってますよ！ 優秀な俺にもっと活躍の場をくれ、つつつてんですよ！」

○とある議場

記者会見の場。

壇上でスピーチしているのはエイジ。

エイジ「ということで、今もなお膨張を続けているロストという現象は全人類にとっての課題といえます」

後ろの席にはキキョウをはじめ、各国の研究員が座っている。

エイジ「そこで我々財団はプロジェクトチームを立ち上げることとし、国を越え人種を越え、この難題に立ち向かっていける人材を広く募集します」

カメラのフラッシュが一斉に焚かれる。

研究員の中には白衣姿のギークも。

ギーク「（緊張気味で）……」

○高校・全景

○同・教室

授業中。

最後部窓際の席にいるのは——制服姿のユキ。

教科書を広げてみるが、さっぱり分からない様子といった顔。

ノートに何となく落書きを始める。

× × ×

記憶の断片。

スクーターの後ろで赤いパーカーの腰に
掴まっているユキの主観(のほんの一部)。

× × ×

ノートに描かれたスクーターの絵。

自分で描いたものの、首を傾げるユキ。

ポケットのスマホが振動する。

取り出すと、キキョウからメッセージが。

『今日は遅くなるから先にご飯食べとい
て』とある。

スタンプで返信するユキ。

窓外を見やり、そよ風に目を細める。

ユキ「……」

はるか向こうにはロストの穴が見える。

○ロスト内部(仮・オフ台詞で適宜使用)

ダイチらしき粒子状の人型が浮遊して
いる。

ダイチの声「ミフユ……覚えてるか。いつ
か家族でキャンプに行っただろう。ユキが
虫が苦手で……ソウマが捕まえたカブトム
シがユキの顔目がけて飛んできて……あの
時は大変だったな……。3回目の結婚記念
日も色々あった。まだユキは小さくて……」
記憶を述懐し続けるダイチ。

○ある研究機関・廊下

歩いているエイジ、キキョウ、ギーク。

ギーク「ユキちゃん……最近どう？」

エイジ「徐々に日常生活にも慣れてきたとこ
ろだ」

キキョウ「勉強についていけないって毎日ほ
やいてるけどね」

ギーク「それで、記憶の方はまだ……」

キキョウ「ええ。タクヤ君という運び屋がい
たこと自体、覚えてないみたい」

エイジ「さすがに波動性物質に晒された時間
が長過ぎた」

ギーク「そっか……」

○通学路

一人下校しているユキ。

同級生らが追いつき、

同級生1「ユキちゃん」

ユキ「？」

同級生1「途中まで一緒だよな」

ユキ「あ、うん」

並んで歩くユキら。

同級生2「授業、ついていけてる？」

ユキ「うーん、あんまり」

同級生1「困ったことがあったら言ってね。

ノートも貸すし」

ユキ「うん。ありがとう」

スクーターに乗った青年（タクヤとは全

くの別人）が通り過ぎていく。

ユキ「（何か気になり）……」

同級生1「どうしたの？」

ユキ「ううん」

○ビニールハウス内

トマトの収穫をしているコウタ。

コウタ「あー、暑ちい〜！」

その場にへたり込む。

近くで収穫しているカイバラ。

カイバラ「若いくせにだらしねえなあ」

コウタ「こんな重労働だなんて思わなかった

っすよ。もつところ、オートメーション化

とか考えませんか？」

同じく収穫しているユミコ。

ユミコ「手間暇かけるから美味しいんじゃない

いの」

カイバラ「ところで……あいつはまだ行方知

れずなのか？」

ユミコとコウタの表情が翳る。

ユミコ「ええ……」

× × ×

カゴに山盛りのトマト。

ユミコ、一つをその場でかじり、

ユミコ「やっぱりこれ、絶対ブランド化すべ

きです。全国に流通させるプランを練りま

しょう」

カイバラ「は？ いやいや、ほぼ趣味だからさ。いいんだよこれで」

ユミコ「らしくないですね。自分が作ってるものに自信がないんですか？」

呆れ、苦笑するカイバラ。

カイバラ「言うようになったな」

ふふっと微笑むユミコ。

コウタ「俺も食っていいっすか？」

ユミコ「あなたはまだ仕事残ってるでしょ」

コウタ「えー？」

汗を一拭き、空を見上げるカイバラで。

○輝く海

○海辺の道路

走るスクーター。

乗っているのは赤いパーカーの男。

——タクヤである。

赤信号で停車するタクヤ。

信号の先にある一軒家。

制服のユキが来て、郵便受けのダイヤルを回す。

その姿に何やら心がざわつくタクヤ。

タクヤ「……」

郵便受けの中身を確認しているユキ。

信号が青に変わる。

気のせいかと思いい直し、走り去るタクヤ。

サイドミラーにユキが映っている。

鏡の中のユキがちらりとこちらを見た。

遠ざかっていくその姿。

一軒家、海に面した窓。

緑のカーテンが揺れている。

〈消滅都市・完〉